

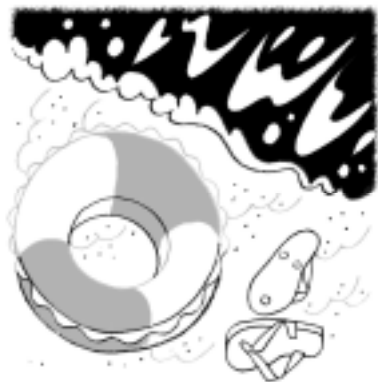
空梅雨かと思われた気候も、台風四号の列島縦断が大雨をもたらしました。十八日の九州南部（鹿児島・宮崎）を皮切りに、各地で梅雨明け宣言がなされ、待ちかまえていたかのようになり、夏の風物詩が街の至るところに顔を出し始めました。涼やかさを求めて開放的になるこの季節ですが、その開放感とは対照的に、日本人として心にしっかりと刻み込まなければならぬことがあります。

それは、国民総動員の末に多くの尊い命を失った「歴史」と、その犠牲の上に現在の「繁栄」が成り立っていることです。今年、大東亜戦争の戦闘終結から六十二回目の夏を迎えます。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃によって始まった大東亜戦争は、三年九カ月の間、国民の総力を動員し、国際社会における独立国家としての生き残りをかけた、文字通りの「総力戦」でした。

この間、日本が動員した兵力は六百万人以上。末期には、沖縄での地上戦や、航空戦力による都市への無差別爆撃もあり、民間人の犠牲者は合計約八十万人に上りました。中でも、昭和二十年三月十日の東京大空襲では約八万人、広島への原爆投下では約十万人、長崎への原爆投下では約七万人が犠牲となりました。

この『今週の倫理』が発信される一週間（七月二十八日から八月三日）だけでも、青森（二十八日・約七百人）水戸（一日・約三百人）八王子（一日・約四百五十人）長岡（一日・約千四百人）富山（二日・約二千七百人）と約五五〇〇人の命が奪われました。



## 尊い命の散華を 心に刻む夏

さんげ

最終的には、民間人犠牲者約八十万人と、軍関係者約二百二十万人を合わせた、合計約三百十万人の尊い命が失われる結果となりました。

戦争は、国家間の問題を解決する最終手段として、国際法規上でも認められている権利ですが、その戦闘において数多くの人命が奪われ、歴史的建造物や文化遺産、そして自然環境が破壊される、最低の方法であることもまた事実です。

しかし、ここで戦争そのものの是非を問うのはナンセンスです。なぜなら、その時代のことは、その時代を生きていた人間にしか分からないからです。すべての結果が分かっている後世に生まれた人間が、あれこれ論評するのは容易なこと。特に批判をするなどもつてのほかに、卑怯としか言いようがありません。

毎年、夏の風物詩が目に見え込んでくるこの季節に、我々が心に刻まなければならないことは、「今の平和や安定が、尊い命の散華の上に成り立っている」という事実です。いま、あなたが生きているこの一瞬一瞬を、あなたは胸を張って、先の方々に報告することができますか。「皆さんが、命をかけて守ってくれたこの日本で、私は皆さんに対して、恥ずかしくない生き方をしています」と言えるでしょうか。

え・牧えみこ

平和について考える機会が増える季節です。今の繁栄を享受する上で、その繁栄の礎となった魂に心を向けてみることも、職場や地域を牽引する私たち倫理法人会員に必要な時間でしょう。